
IS 喜楽にいきましょう 改

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 喜楽にいきましょう 改

【Nコード】

N3377Y

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

分かるか？ なんとなくて育てた子供が今や立派な男になって私はとても嬉しいんだ。嬉しいんだが、まさか面倒な事になるとは思わなかった。何故ISなんて物を起動出来たのか？ まあ、諦めてIS学園に行かせるしかないな。それにしても、まさかアイツ等とは別にISを動かせる男が現れるとは。不思議なものだ。……関係ないな。私としてはアイツ等が楽しく学園生活を送ってくれるのなら。

この作品は『IS 喜楽に生きましよう』のリメイク版です。内容を
変更しましたのでお気軽にご覧ください。

すり替わりー夏の第1話(前書き)

やっぱり明るい方が執筆しやすいです。

すり替わり一夏の第1話

教室の真ん中の最前列はとてもプレッシャーを感じてしまうことに初めて気がついた。何となく嫌な席であることは知っていたが、実際に体験してみると明確に嫌なものとして理解出来る。

目の前には教卓があり、先生と対面しながら授業を受けなくてはならないものだから授業中に気を抜いていることが出来ない。後ろには沢山の生徒達が席に座っているのです。その視線を感じてしまう。多少の身動きをするだけで後ろの反応を気にしてしまい、なかなか落ち着けない。

ただ、嬉しいことがある。

このクラスのほぼ全員が女の子であることだ。現実に具現化した男の夢だ。ザ・ハーレム、マジで時よ止まれ！！

少し気になることもあるのだ。

それは後ろの席に居る。

「みなさん、そろっていますね。それでは、これから一年間よろしく願います」

と、山田先生の登場だ。

少しサイズの合わない服からでも自己主張をしている胸が凶悪な小動物っぽい女性だ。そこに視線が向かってしまうのは男の性だな。

それにしても原作の一夏と言う奴は苛立ちを感じさせるくらいの鈍感野郎だ。人の特に異性の好意に気づけないなんてのは酷すぎる。

だから、俺が一夏となってこの世界に降臨したんだ。一夏の代わりにヒロインズの好意を全て受け入れる。俺なら上手くやれる。たとえ俺の知らない変な奴がいたとしてもな。

「織斑くん」

「はい」

いつの間が始まっていた自己紹介が俺の番になったらしい。

俺は席を立って後ろを向いた。

視界のほとんどに女子が映りこんでいて、思わずニヤリと笑ってしまいそうになる。

だが、この状況で笑ってしまったのはドン引きされてしまうかも知れない。出来る限り平常心を装って挨拶をする。

「えーっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

原作通りの内容での挨拶だが、いきなり歯の浮くような台詞を言って原作の流れから逸れるのは良くない。まだ始まったばかりなのだ。最初だけは一夏と同じ感じでやれば話が進む。後は腕の見せ所。

女子達は俺が次に何かを言うことを期待して待っている。ここで期待に応えられない罪悪感があるのだが、今は仕方ない。

「以上です」

俺が終了の言葉を放つとお笑い芸人みたいにずっとこける女子が何人かいた。

期待を裏切ってしまったって申し訳ないなと思っていると、後頭部に強い衝撃が走った。

「いつ!?!?」

痛みに耐えながら振り返れば、俺の姉である織斑千冬が出席簿を持つて、その存在感を撒き散らしていた。

ここまで音も気配もなく人の頭を叩くのか、我が姉は。恐れるべきなのか、感心すべきなのか分からないのだが、とりあえずめちやくちや痛い。

「げえ、関羽!？」

もう一度叩かれる。心構えはしていたが、痛いものは痛い。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

別に良いだろう。肩書きに三国志の英雄が加わっても。もう既に有名人なのだから。

そんな俺の考えなど微塵も分からない千冬は山田先生と会話した後、俺達に演説をし始めた。

有名人の演説にクラス的女子達は黄色い声援を飛ばしてあれやこれやと好き勝手に喋り始めたのだ。

千冬が明らかにうつつとおしそうにしているが、それがさらに女子達の勢いを強くするだけであった。

「で、まともな挨拶も出来ないのか、お前は」

「いや、千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

「織斑くんって千冬様の弟？」

「いいな、代わってほしいな」

「席に着け馬鹿者」

原作に忠実な流れでスイスイと進む。

俺が座れSHRが終わり、早速授業が始まる。そして訳の分からない授業で苦勞するんだな……原作の一夏は。

なんて思っていたが、原作と違う流れが現れた。

「まだ、少し時間があるな。では残り時間で出来る限りの自己紹介をしてもらう」

初めて聞く台詞に一瞬俺の思考が停止した。知らない流れだ。

後ろで誰かが席を立つ音が聞こえてきたので、反射的に後ろを向いてしまう。

千冬に叩かれてしまうかと思ったが、自己紹介している人の顔を見て良いので叩かれることはなかった。

席を立てて周りの注目を集めているのは、黒髪の少年。俺と同じか少し高いくらいの身長で眼鏡をかけて笑顔を見せている。

「はじめまして。舞月砂喜まいつきなほです。よろしくお願いします」

ゆったりとした動作で頭を下げた砂喜が腰を下ろすと、後ろに控えていた先ほど自己紹介をした人物と同じ顔をした者が立ち上がる。眼鏡はかけていないみたいだが。

「舞月遊樂まいつきあゆみです。よろしくどうぞ」

ニコリと笑う遊樂。無邪気な笑顔だ。さっきの奴は温まるような笑顔だったが。

てか、コイツ等は一体なんなんだ！？ 俺は知らないぞ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3377y/>

IS 喜楽にいきましょう 改

2011年11月8日02時09分発行